



《教育長メッセージ 第72号》

『多様性』

実は、「教育長の部屋」を休んでいる間に、「第2期えびなっ子しあわせプラン」は、今年度が、3カ年計画の最終年度となり、私は、昨年から、令和2年度にスタートする「第3期えびなっ子しあわせプラン」に向けての構想を練っているところです。

その中で、私は、「多様性」をキーワードに、これからの海老名の教育について、あれこれ考えることにしました。

◇「多様性」をキーワードに

私は、あれこれ悩む中で、思考の軸となるキーワードを設定しないと構想が組み立てられないと考えました。

その頃、私は、海老名市の学校教育の現状として、不登校の子どもが、支援級に在籍する子どもが、ともに200人以上になったことをとても重く受け止めていました。

そして、インクルーシブ、虐待や性的マイノリティへの社会認識の変化も気になっていました。

何より、前回の「忘れたこと」でも述べましたが、第2期えびなっ子しあわせプランを策定する中で、本当は、その核として考えていた「ひとりひとりを大切にした教育」を文字に表さなかったことの後悔がありました。

真に、ひとりひとりの「ちがい」に対応した教育が実践できないかと考えました。

また、平成の時代に入ってから、保護者のさまざまな価値観や社会のさまざまな要請の広がり、スピードに振り回され、学校は、それを受けることに疲弊していると実感していました。

これまで学校が得意としてきた画一的な方法が通用なくなり、逆に、そこに多くの問題が発生しているように見えてきました。

この先は、A Iとの共生による社会生活が営まれることとなり、人間として生きることの価値の再認識、転換が図られることが大いに予想できるところです。さらに、今は、国際社会が逆走している感がありますが、この先は、地球規模で、人種や宗教などを越えて、地球人として様々な人たちと課題を共有し解決することが求められます。

先の見えない時代に、新たな課題に対応できる人間の育成が教育のひとつの課題であると言われて久しいのですが、私は、これからはさらにその速度が上がり、複雑化すると考えるのです。

そして、そんな時代を人間としてしあわせに生きるための手法としては、起こったことに対処的に対応するのではなく、教育の中で、子どもと大人が、あえて、さまざまな課題に働きかけることが必要だと思うのです。

これらのことから、私は、「多様性」という言葉をキーワードとして、「これからの教育の在り方」を思考することとし、現時点での考え方として、前向きにすべての多様性を受容して、あえて多様な学びや生活の場を設定して、多様な人やものによって進める、これからの「海老名の教育」を試案として考えることにしたのです。

「多様性」をキーワードとした「第3期えびなっ子しあわせプラン」の具体的な計画については、計画がまとまり次第、みなさんに説明したいと思います。

それでは、次回は、『新型コロナウイルス感染症』について、私の思いや考えを述べてみたいと思います。